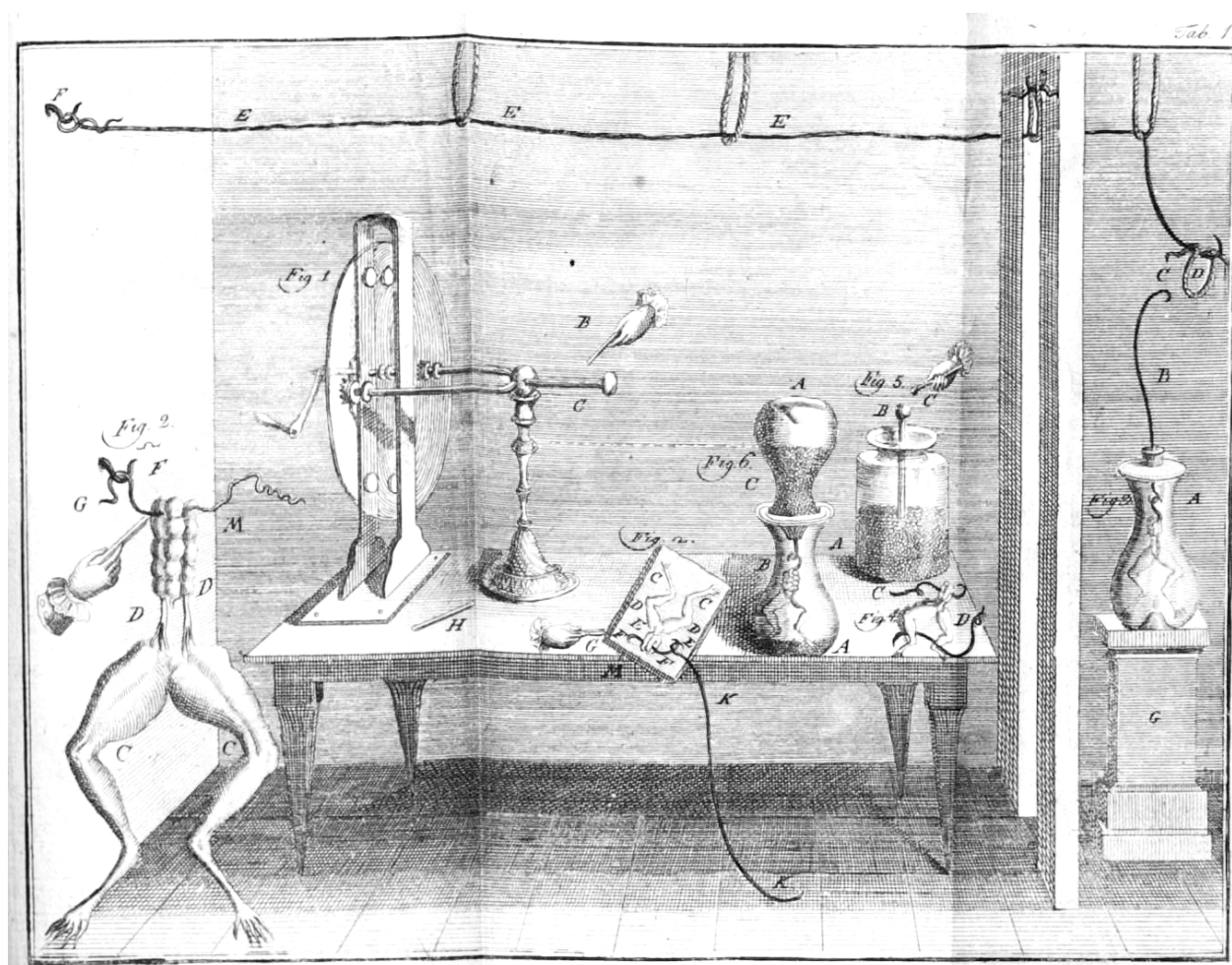


Shelley Studies

The Works & Epoch 1792-1851

Annual Bulletin of Japan Shelley Studies Center

日本シェリー研究センター年報 第25号 (2017年6月)



Luigi Galvani (1737-1798), *De viribus electricitatis in motu musculari commentarius* (1791). Wikipedia Commons.

Vol. 25 (2017)

Shelley Studies
The Works & Epoch 1792-1851
Vol. 25 Summer 2017

Annual Bulletin of Japan Shelley Studies Center

日本シェリー研究センター年報

第 25 号 (2017 年 6 月)

ISSN 1344-1957

The Bulletin of Japan Shelley Studies Center (*Shelley Studies*) is published annually by Japan Shelley Studies Center. It features articles on the works and lives of Percy and Mary Shelley along with their contemporaries. The articles include reports and discussions in literary, social and historical topics appertaining to the period of their life time. The editors welcome submissions from members and non-members of the society interested in the subjects.

Japan Shelley Studies Center

President

ABE Miharu

会長

阿部 美春

Secretaries

HOSOKAWA Minae

KASAHARA Yorimichi

KITANI Itsuki

KUROSE Yukako

NIINA Masumi

SHIRAISHI Harue

TAKUBO Hiroshi

UENO Kazuhiro

幹事

細川 美苗

笠原 順路

木谷 巖

黒瀬 悠佳子

新名 ますみ

白石 治恵

田久保 浩

上野 和廣

Auditors

KOYANAGI Yasuko

SASAKI Mari

会計監査

小柳 康子

佐々木 眞理

Office

日本シェリー研究センター 事務局

〒069-8501 北海道江別市文京台緑町 582 番地 酪農学園大学 白石治恵 気付
Japan Shelley Studies Center c/o SHIRAISHI Harue, Rakuno Gakuen University,
582 Bunkyo-dai Midorimachi, Ebetsu-shi, Hokkaido, Japan 069-8501

Tel & Fax: +81-11-388-4877

E-mail: harues@rakuno.ac.jp

Contents

News		1
Feature Articles:		
Commemorating the 200th Anniversary of the Birth of <i>Frankenstein</i>		
Shelley-Byron Group at the Villa Diodati in the summer of 1816	ABE Miharū	2
The Gathering at Villa Diodati that Led to the Creation of Horror Stories	AIURA Reiko	3
<i>Frankenstein</i> et Rousseau	AO Yasuyoshi	5
Article:		
Dating the Birth of Frankenstein's Creature	UKI Kenichi	7
Reviews:		
Royal National Theatre, "Frankenstein" at Kobe Asahi Hall, Dec. 25, 2016	OKA Hayato	19
Differential and Integral Time of Frankenstein: Reviewing Victor Frankenstein's Progenies	UKI Kenichi	22
Miscellanies:		
Visiting Professor Shigetoshi Ishikawa	KUROSE Yukako	24
A Word from a Member	ISHIKAWA Shigetoshi	24
Document:		
Reprinting "On 200th Anniversary of Percy Shelley" by Kudo Naotaro	ABE Miharū	25
A Manuscript by Kudo Naotaro		26
Publication:		27
<i>The Snake and Eagle Wreathed in Fight: Prose in Shelley's Middle Period</i>		27
A Word of Gratitude	ABE Miharū	28
Annual Bibliography		28
From the Office of Shelley Studies Center		28

NEWS

The twenty-fifth annual conference of Japan Shelley Studies Center (JSSC) was held at Sanjo Conference Hall on Hongo Campus, University of Tokyo on December 3, 2016. Professor Reiko Aiura (Shiga University of Medical Science) and Professor Yasuyoshi Ao (Kyusyu University) gave special lectures in a symposium entitled "Symposium Commemorating the 200th Anniversary of the Birth of *Frankenstein*," moderated by the president of the Japan Shelley Studies Center, Miharuru Abe. Professor Ao and Professor Aiura discussed the nature of literary collaboration and the intellectual backgrounds of the Shelley-Byron Circle in the summer of 1816 in Geneva. The abstracts of their talks appear below.

Twenty-sixth conference will be held at Sanjo Conference Hall on the same campus on Saturday, December 2, 2017. The program will include a special lecture by Motonobu Yoshioka. The topic of "Shelley and Science" will be discussed in the symposium, which Masumi Niina is to organize with three other speakers, Lawrence Masakazu Yoneda, Rina Suzuki, and Kenichi Uki.

日本シェリー研究センターは、平成 28 (2016) 年 12 月 3 日 (土) 東京大学本郷キャンパス内山上会館にて第 25 回大会を、「1816 年ディオダーティ荘—『フランケンシュタイン』誕生二百周年記念特別プログラム」と題して開催した。阿部美春会長の挨拶に引き続き田久保浩氏の司会でプログラムが行われ、滋賀医科大学の相浦玲子氏が「ディオダーティ荘における恐怖小説饗宴をめぐって」と題して、また九州大学の阿尾安泰氏が「ルソーからみた『フランケンシュタイン』」と題して、特別講演を行った。

続くシンポジウムでは、「1816 年ジュネーヴ湖畔におけるシェリー・バイロン・サークルの文学的交流」をテーマに、司会を阿部会長が、パネリストを阿尾氏と相浦氏が務めて、ルソーがシェリー・バイロン・サークルに及ぼした影響、ジュネーヴという都市国家における精神性、物理的な根拠を超えて「生命」について抽象的に表現した『フランケンシュタイン』の新奇性、女性の視座における科学、およびロマン派の中でも意見が分かれる科学の二面性（破壊か、全能か）など、フロアからの意見も交えて活発な議論がなされた。このシンポジウムの動画は、当センターホームページから閲覧可能である。

総会は平原正氏を議長に行われた。まず会計の黒瀬悠佳子氏より会計報告があり、承認された。次いで任期満了の役員（笠原氏、田久保氏、新名氏）の再任が承認された。

懇親会は藤田幸広氏の司会のもと、和やかな雰囲気で行われた。

次回第 26 回大会は、平成 29 (2017) 年 12 月 2 日 (土) 東京大学本郷キャンパス内山上会館大会議室にて、吉岡丕展氏による特別講演、「シェリーと科学」をテーマとして、司会とレスポンスを新名ますみ氏、パネリストを米田ローレンス正和氏、鈴木里奈氏、宇木権一氏が務めるシンポジウムが行われる予定である。

以上

A Symposium: Commemorating the 200th Anniversary of the Birth of *Frankenstein*

The year 2016 marks the 200th anniversary of the birth of *Frankenstein: Or the Modern Prometheus*, which has since had tremendous impacts on the modern imagination. Commemorating the year, this symposium focuses on the productive association of the Shelleys and Lord Byron group in the summer of 1816, as well as on Jean-Jacques Rousseau, a native of Geneva whom they paid homage to. Yasuyoshi Ao and Reiko Aiura participate in the symposium moderated by Mihar Abe.

1816 年夏ジュネーヴ湖畔における シェリー・バイロン・サークルの文学的交流

阿部 美春

2016 年は、『フランケンシュタイン』が誕生してから二百年を迎える年である。そこで今年のシンポジウムは、二百周年記念企画として、作品誕生の原点にたちかえり、1816 年夏、ジュネーヴ湖畔でのシェリー・バイロン・サークルの文学的交流と、彼らが信奉したジュネーヴ出身の思想家ルソーに焦点をあてた。1816 年夏、湖畔のディオダーティ荘に集った若者たちの交流から、『フランケンシュタイン』が誕生したことは、英文学史のよく知られたエピソードである。前年 4 月のインドネシア、タンボラ山噴火の影響で史上まれに見る低温・多雨の夏、彼らは退屈しのぎにドイツの恐怖小説をフランス語訳で楽しみ、バイロンの提案で幽霊譚競作に興じた。館を訪れたバイロンの友人「マンク」ルイスも、怪奇譚の語り部となった。彼らの私生活あるいは作品ゆえに、この交流は専ら醜聞として語られ、ラッセルの『ゴシック』(1986)やスアレスの『幻の城』(1988)等の映像によってそのイメージが定着した感がある。確かに、ディオダーティ荘に集ったシェリー・バイロン・サークルは、ジュネーヴに滞在するイギリス人避暑客の好奇の的だったが、この交流は、スキャンダルだけでなく、文学においても実りが多かった。

従来、文学的交流の焦点は、イギリス・ロマン派メジャー詩人シェリーとバイロンに集中し、そこに 20 世紀後半以降メアリが加わった。シンポジウムでは周辺的存在として等閑視されてきたポリドリと、交流

のもう一つの成果『ヴァンパイア』を含めた恐怖小説の饗宴をめぐる、また、この年、詩人たちがそのゆかりの地を詣でたルソーの影響について、ルソー研究の専門家を招聘して新たな知見を得た。

当時、ジュネーヴは、陰鬱な気候のイギリスを逃れる避暑地として人気が高かったのだが、故国のスキャンダルと同国人の目を逃れたいはずの両詩人が、敢えてその地を選んだ理由のひとつは、ルソーと『新エロイズ』の聖地詣にあったことは想像に難くない。メアリは、詩人たちの聖地詣に同行してはいないが、啓蒙思想を信奉するフランケンシュタイン一家をジュネーヴ共和国市民とし、死の床につくフランケンシュタインの母親について、子どもを救うために我が身を犠牲にし、毅然と死を受け入れる母性愛の鑑として、ジュリを彷彿させる姿で描いている。

シンポジウムでは、相浦玲子氏と阿尾安泰氏の特別講演をふまえ、「1816 年夏ジュネーヴ湖畔におけるシェリー・バイロン・サークルの文学的交流」というテーマのもと、フロアと意見交換をした。センターでは、これまでシェリー研究者からみた『フランケンシュタイン』として、シンポジウムを組んできたが、今年は、バイロンの専門家、相浦玲子氏ならびにヨーロッパ文学思想の専門家、阿尾安泰氏にパネリストとしてご参加いただき、『フランケンシュタイン』をはじめロマン派第二世代の文学運動の新たな眺望を得ることをめざした。

(立命館大学)

ディオダーティ荘における恐怖小説饗宴をめぐる

相浦玲子

今からちょうど 200 年前の 1816 年夏に、スイスのディオダーティ荘というレマン湖畔の別荘に数人の男女が集った。しかし、その集いのメンバーは当時のごく平均的な若者ではなく、さまざまな内面を持つ人々で、彼らの織りなす関係・非関係はこの場限りに終わらない多くのものを後世に残した。フランケンシュタインとヴァンパイアは、現代の我々にとって怪奇ものの代表としてあげられるであろう。そのどちらも発展の芽はこのとき生まれた。ヴァンパイアについては、古くからの伝説をバイロンとポリドリが感情のもつれも手伝って近代的なヴァンパイアを仕立てていくことに貢献したが、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』の独自性には目をみはるものがある。

その年は、“the year without a summer”と呼ばれるように、世界的に見ても異常な気象の年であった。前年 1815 年 4 月のインドネシアのタンボラ火山の噴火によって、北半球全体が薄暗くなり、嵐や雷も多く雨の多い気象を招いていた。現代の我々は、大きな自然災害の時に思い起こさせられる以外は、真の闇に触れることはあまりあるまい。また室内に閉じ込められる不自由さは、多くの人にとってテレビ、コンピューター・ゲームなどで簡単に解消できるようになっている。しかし、1816 年にはそれらが何も存在していなかったために、若者にとって娯楽が存在するとすれば、「語ること」が中心になったであろうし、あるいはまた、ろうそくの灯りの下で誰かが朗読するというくらいしかなかったであろう。このような状況は、普段の夏なら戸外で自然を楽しむこともできる時間帯をも暗くして、館の周りにあまり人がいない寂しい環境の中、人の心に微妙に影を落としたのではないだろうか。また、いにしえから文学の原型の一つである「語り部」の伝統を彷彿とさせる状況があったのではないだろうか。

スキャンダルにまみれたバイロンはこの年、前年に結婚したばかりの妻と別居して 4 月に自己追放するかのよ

うに英国を去って大陸に向かった。一方、シェリーは妻ハリエットを置いて、駆け落ちしたメアリ・ゴドウィンと大陸に向かった。バイロンは年若く、物議を醸すことの多いポリドリの伴い、シェリー「夫妻」は、メアリの義理の姉妹、クレア・クレアモントを伴っていた。そもそもこのグループのスイスでの出会いは、春にバイロンと関係ができていたクレアと、クレアを通じてバイロンに興味を抱き始めていたメアリの二人の画策で実現したと言える。しかし、バイロンは既にクレアに対して冷淡で、シェリーとバイロンは意気投合して高邁な議論に夢中で、どちらかというともまだ 18 歳に過ぎないメアリはポリドリと取り残されることも多く、メアリはシェリーを独り占めにするバイロンにやや当惑したが、同時にシェリーにはない面をバイロンの中に見出した。クレアはバイロンと近い関係にあるポリドリに嫉妬するというような複雑な感情に支配された人間模様がそこにはあった。それでもメアリは後に、彼女にとってはこの夏が人生で一番楽しい時期であったと述懐している。

このような中、毎夜、皆が集まると文学談義などが始まった。ある夜、コールリッジの『クリスタベル』をバイロンが朗読してシェリーが恐怖におののいて叫びながら部屋をとびだした、という逸話もある。ここに集っていたうら若き女性たちにとっても恐怖の体験であったことは想像に難くない。フランス語で書かれたドイツの恐怖小説集『ファンタスマゴリアーナ』を読んでヒントを得たバイロンの発案で、一人一人が恐怖のストーリーを作ること一同が賛成したことが、そもそもの恐怖小説饗宴の始まりであった。

本講演では、このディオダーティ荘での集いについて述べた後、あまり広く知られていないポリドリという人物について、またメアリとバイロンのその後の関係について述べることにする。（滋賀医科大学）

The Gathering at Villa Diodati that Led to the Creation of Horror Stories

AIURA Reiko

Just two centuries ago a remarkable handful of young adults gathered at a house called Villa Diodati next to Lake Lemman in Switzerland. The group included Lord Byron, the poet Percy Shelley, Mary Godwin, her step-sister Claire Clairmont, and John Polidori, a young doctor of Italian descent. Relationships in the group were not always easy, but together these people were remarkably productive; one evening they produced some of the landmarks of fiction which are well-known even today.

The two great achievements which arose in an evening of story-telling were Mary Godwin's (later Mary Shelley's) story of "Frankenstein" and Byron's vampire story, which was later adopted by John Polidori to create the new genre of aristocratic vampire, quite different from the previous Eastern European peasant image. The meeting took place in the "year without a summer" – a year of vile weather following the eruption in 1815 of Mount Tambora in Indonesia. The terrible, dark, stormy weather was perfectly conducive to the atmosphere of "Gothic" horror in the stories. Byron, who had married in the previous year and become embroiled in scandal in England, left his wife and daughter, and in April 1816 he took himself into exile from England; Villa Diodati was his refuge that summer.

Shelley left his wife Harriet in England and took Mary Godwin, with whom he was in love, to a house near Villa Diodati. Polidori, too young to be allowed to practice as a doctor in England, went as Byron's companion.

Claire Clairmont had met Lord Byron previously and formed a relationship with him, and it seems that she and

Mary had proposed a meeting with Byron in Switzerland.

Byron and Shelley quickly became close friends, and they discussed philosophical ideas with passion for hours, while Byron distanced himself from Claire Clairmont. Only Byron and Polidori were proper residents in the Villa, while the others lived nearby and visited in the evenings. Mary was only eighteen years old. She was sensitive and highly intellectual. There may have been considerable competition for attentions among these young people, and it seems that Shelley distanced himself from Claire while Byron was around; and Claire may have competed with Polidori for Byron's attention. Relationships within that small group were complex. Still, Mary Shelley remembered that summer as an especially wonderful time in her life.

In the evenings they often discussed literature. On one such occasion, Byron was reading aloud from Coleridge's "Christabel" and Shelley, filled with horror, left the room to avoid hearing any more; one wonders about the effects on the others. Byron, inspired by their reading of *Fantasmagoriana* (a collection of German horror stories) in French, suggested that each person present should compose and tell a horror story, and all agreed. Of the tales told that night, two achieved lasting fame.

In this account, I would like to concentrate on two topics: Polidori, his life and works (not widely known), and the relationship between Mary and Byron, and their later friendship following Shelley's death.

(Shiga University of Medical Science)

ルソーからみた『フランケンシュタイン』

阿尾 安泰

ルソーとロマン主義との関係を考えるとき、その親和性は誰の目にも明らかに思える。ルソーはロマン主義の父のような位置づけである。ただそれは主として、ロマン主義の側からルソーを見た場合ではないだろうか。もしルソーがこの 19 世紀に生まれる文学グループの中に現れたとしたら、まわりから投げかけられる称賛にたいして、当惑することも少なくないのではないだろうか。

我々がルソーをロマン主義の先達として捉えて満足できるのも、そこに 18 世紀から 19 世紀にかけての連続的な文学的潮流を想定しているからである。ルソーがこのロマン主義という流れを準備したというわけである。実際こうした捉え方は説得力があり、また多くの光明を与えていることも否定できない。ただこの見方で全てを考えようとすると、一つの陥穽に陥ることになりはしないだろうか。連続性の神話である。確かに 18 世紀は続く世紀を準備した面もあるが、それがすべてではない。後の時代と断絶した面もあるはずである。ところが、そうした視点が連続性を強調する中で、抜け落ちてしまうのである。18 世紀の独自性を確保する必要があるだろう。我々としては、ルソーとロマン主義との類縁性を認めた上で、その差異にも注目すべきであろう。たとえば、キーワードとなっている「自然」、「内面」などの語も両者が用いる微妙な違いに注目していくべきであろう。

また 18 世紀という概念にも注意が必要である。たとえば、ルソーの作品について、18 世紀フランス文

学に属するものという位置づけが与えられることもある。それは、彼の作品がヴォルテールなどの作品と同じ地平を共有するということだろうか。それでは、ルソーの独自性を見失うことになるだろう。ここにもう一つの陥穽が現れる。統一性の神話である。フランス語を用いながらも、ルソーほど自らの出自たるジュネーヴにこだわり、パリを中心とするフランス文化圏にたいする距離感を強調した作家はいないのである。文化の多様性を絶えず意識してきたのがルソーである。18 世紀の言語文化空間がこうした多層性の中から自らの活力を引き出してきたことを忘れてはならないだろう。

こうして、統一性、連続性などを問い返すことで何が見えてくるのかというのが今回の主題である。具体的には、メアリー・シェリーの記念碑的な作品である『フランケンシュタイン』を突破口として取り上げる。そのテキストが前の時代からの語りの枠組みである書簡等を使いながらも、いかにそれを新たな形に組み上げていくのかを考えてみたい。さらにこの作品において重要な意味を持つ、「生命」、「科学」、「家族」などの概念が 19 世紀以降に孕む新たな意味を検討する。そうした語りが切り開く新たな地平を、それ以前の状態と比較することで、どのような展開が以後生まれていくのかを明らかにしてみたい。

(九州大学)

Frankenstein et Rousseau

AO Yasuyoshi

Au 19^e siècle, les auteurs romantiques considéraient Rousseau comme un précurseur pour leur école. Mais Rousseau lui-même aurait-il partagé cette opinion ? S'il avait engagé la conversation avec eux, même leurs louanges l'auraient profondément déconcerté, et ce penseur solitaire n'aurait sans doute pu accepter l'image que ses admirateurs se faisaient de lui.

Rousseau est considéré comme un précurseur du romantisme parce qu'on suppose l'existence d'un courant littéraire apparaissant dès la seconde moitié du XVIII^e siècle pour préparer l'arrivée du romantisme. Une telle perspective permet certainement d'expliquer l'apparition du mouvement romantique dans l'histoire littéraire française, mais elle ne permet pas d'expliquer la variété des différents mouvements dans les domaines littéraire et artistique. Cette simplification présente le risque d'alimenter le mythe d'une continuité qui mettrait en relation des phénomènes fort différents malgré la distance qui les sépare.

Au lieu de parler de ce qui relie XVIII^e et XIX^e siècle, il est important d'examiner ce qui sépare ces deux époques, autrement dit de chercher l'originalité du XVIII^e siècle. Qu'est-ce que le XVIII^e siècle ? On

utilise souvent le terme « lumières » pour qualifier cette époque. Mais ce n'est qu'un des aspects qui caractérisent ce siècle. Les études récentes sur le XVIII^e siècle soulignent la diversité des mouvements intellectuels à une époque où des partis fort différents s'opposent pour réaliser leurs objectifs idéologiques. Rousseau s'efforce d'ailleurs de souligner la distance qui sépare ses idées des tendances dominantes de cette époque. En d'autres termes, le XVIII^e siècle se caractérise par une grande complexité, faite à la fois de zones éclairées et de zones sombres.

Il est temps de reconsidérer la pseudo-continuité qui vise à négliger la différence entre les objets et la pseudo-unité qui vise à négliger la complexité des activités dans des domaines très diversifiés. Nous voudrions donc comparer les textes rousseauistes avec le *Frankenstein* de Mary Shelly. A partir de cette comparaison, nous mettrons en évidence le nouvel épistémè qui caractérise l'œuvre de Shelly avant de montrer l'originalité d'un Rousseau qui échappe aux interprétations superficielles et faciles.

(Université du Kyushu)

Dating the Birth of Frankenstein's Creature

UKI Kenichi

The birth of the Creature by Victor Frankenstein is estimated to be on 16th of November, 1793. Mary Shelley's *Frankenstein: Or the Modern Prometheus*, despite being a fictional work, reflects accurately the social and historical background of the story. Taking advantage of the time markers referring to historical dates, years, events, and publications, found throughout the novel, we can reconstruct the chronology of the events narrated in the novel. Furthermore, based on the phases of the Moon, we can surmise the exact dates. The following investigation lists the time markers, in order to construct the chronology, and attempts to provide the basis for dating the birth of the Creature. Even though, under some circumstances arbitrary choices cannot be avoided, and there arises the need to account for the inconsistency of the time markers, we can still arrive at a probable date of the Creature's birth.

フランケンシュタインの怪物の誕生日についての考察

宇木権一

フランケンシュタインの怪物の誕生日は、1793 年 11 月 16 日と推定できる。メアリー・シェリー作『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメテウス』は、架空とされている小説でありながら、舞台背景や時代設定は明確である。作中に散りばめられた、日付、実在の出来事、作品などの時間標識から、年表を作成する事が出来る。更に月の満ち欠けの情報を元に、日についても特定する事が可能である。一部、恣意的に決めなければならない所はあるが、以下、時間標識を一覧し、物語の時系列を確定した後、怪物の誕生日を特定するための根拠を示す。また、時間標識の矛盾点についても考察したのち、怪物の誕生日の日付について結論する。

時間標識

小説の舞台となっている年代を示す手がかりである時間標識を、小説の登場順に列挙してゆく。ただし『フランケンシュタイン』は入れ子構造の為、一部、物語のプロットとは異なっている箇所がある。

時間標識 1：ウォルトンの手紙

冒頭のウォルトンの手紙 1 (12 月 11 日付、サンクトペテルブルク (St. Petersburg)) より、17xx 年 となっている事から、物語の舞台となる世紀は 1700 年代と特定できる。

時間標識 2：「老水夫の歌」についてのウォルトンの言及

ウォルトンの手紙 2 (3 月 28 日付、アルハンゲリスク) で、ウォルトンが、コールリッジの「老水夫の歌」に言及している。「老水夫の歌」が収録された『リリカル・バラッズ』の出版は 1798 年 10 月なので、小説の冒頭 (物語としては終盤) は 1799 年だと確定できる。

時間標識 3：ヴィクター発見時の日付と曜日

ウォルトンの手紙 4 より、8 月 1 日にウォルトンが、北極海でヴィクターを発見する (7 月 31 日の翌日という記述から)。ここで、7 月 31 日 (月曜) と書かれている。日付と曜日の組み合わせは、年によって異なるため、ある程度年代が分かれば推測する事が出来る。

グレゴリオ暦で、7 月 31 日が月曜になるのは 1797 年である。しかし、『老水夫の歌』の時間標識 2 と矛盾している。矛盾しない 1799 年では、水曜日である。後述の矛盾点の考察でも述べる様に、時系列的にも不可能である事に加え、この日付が正しいかどうか疑わしいため、この時間標識は無視する事とする。

時間標識 4：ヴィクターのインゴルシュタットでの研究

第三章冒頭より、ヴィクターは 17 才の時、インゴルシュタット大学に入学する。母親の死の影響で少し遅れて入学している。時間標識 9 から逆算して、1789 年の事と思われる。

その後、2 年間勉強を続けた後、怪物創造のインスピレーションを受ける。（“Two years passed in this manner, during which I paid no visit to Geneva.”）その為、19 才の時、おそらく 1791 年頃から、怪物の創造を始めたと思われる。

怪物を創造する第 5 章冒頭に、二年近く研究してきたとある。約 2 年後、ヴィクター 21 歳の時、怪物を創造する。時間標識 9 から逆算すると、1793 年 11 月の事である。

時間標識 5：引用作品の時代錯誤

第 5 章で、ヴィクターが逃げ惑っている時に、コールリッジの「老水父の歌」が引用されている。ヴィクターが言ったとすると、怪物の誕生した時点で 1798 年以降となり、物語の終盤では 1800 年代に突入してしまい、多くの時間標識から矛盾する。しかし、ヴィクターが直接言ったとは書いていないので、「老水夫の歌」を好んだウォルトンが勝手に加えたり、ヴィクターが後で知って、会話に用いた可能性が大きい。その為、この時間標識については無視する。

18 章終盤のクラークヴァルのシーンに引用されているワーズワースの「ティンターン僧院」についても、「老水夫の歌」と同様の事が言える。

10 章では、夫パーシー・シェリーの詩「無常」が引用されている。フランケンシュタインの初版はパーシーの作品だと思われていた経緯も含め、意図的に入れている事は明らかなので、これも時間標識から除外する。

時間標識 6：エリザベスの手紙

第 6 章冒頭にヴィクターが回復した際に受け取るエリザベスの手紙があり、日付が 3 月 8 日（March 18）となっている。つまり、11 月に怪物を創造してから、ヴィクターは最低でも 4 ヶ月ほど寝込んでいた事が分かる。時間標識 9 から逆算すると、1794 年 3 月だと思われる。

時間標識 7：アーネストの生年

また、同じ第 6 章冒頭のエリザベスからの手紙の中では、ヴィクターの弟アーネストについて、“He is now sixteen”と記述されている。1794 年 3 月 18 日までに 16 歳という事になるので、逆算すると、アーネストは 1777～8 年生まれである。兄ヴィクターとは 6、7 歳違いだと推測される。

時間標識 8：クラークヴァルとの交遊

その後、ヴィクターの体調は回復する。第 6 章中盤で、夏がクラークヴァルとの勉強で過ぎ去り、その後、ダラダラとスイスへの帰郷が長引き、来年の春になってしまった事が語られる。

（“Summer passed away in these occupations, and my return to Geneva was fixed for the latter end of autumn; but being delayed by several accidents, winter and snow arrived, the roads were deemed impassable, and my journey was retarded until the ensuing spring.”）

ここまでで、怪物の誕生から年が二回変わっている事が分かる。時間標識 9 から逆算すると、この時点は、1795 年春だと推測される。

時間標識 9：ウィリアムの死の日付と曜日

7 章冒頭に 5 月 12 日付の父の手紙があり、先週の木曜（5 月 7 日）（Last Thursday [May 7th]）にウィリアムが殺されたとある。時間標識 3 と同様に日付と曜日の組み合わせを調べると、グレゴリオ暦では、1795 年 5 月 7 日が木曜日の条件を満たす。その一つ前は、1789 年が該当するが、古すぎる為、他の多くの時間標識と矛盾する。そのため、ウィリアムが殺されたのは 1795 年の事だと考えられる。ここから逆算すると、怪物の誕生は 1 年以上前の 11 月なので、1793 年 11 月となる。

時間標識 10：ヴィクターのジュネーヴ帰還までの回想

7 章冒頭の 5 月 12 日付の父の手紙を受け取り、ヴィ

クターは急いでジュネーヴに戻る。1795 年の 5-6 月頃には戻ったと推測される。ジュネーヴに戻って家族と再会した時に、故郷を後にしてから約 6 年経ったとヴィクターは回想している。

つまり、自然哲学の基礎の勉強 2 年間、怪物の創造 2 年間、怪物創造後の療養とクラヴァルとの勉強や旅行の 2 年間、計 6 年間である。1795 年の 6 年前は 1789 年であり、ヴィクターはその頃に、インゴルシュタット大学に入学した事になる。

時間標識 11：ジュスティース処刑の時期

第 9 章中盤で、ウィリアムとジュスティースの死に疲れたヴィクターは、8 月半ばにモン・ブランの近くへの旅行を始め、そこで怪物と初めて対話する。その際に、それがジュスティースの刑死から約 2 ヶ月とかかかっている。ここから、ジュスティースの処刑が、1795 年 6 月頃だと分かる。

時間標識 12：若きウェルテルの悩み

第 15 章で、怪物がゲーテの『若きウェルテルの悩み』を読んでいる。『ウェルテル』が出版されたのは 1774 年である。また、怪物が読んだ時、まだ生まれてから 2 年も経っていないとされている為、怪物が生まれたのは 1772 年以降となる。

時間標識 13：ヴィクターのイギリス滞在

第 18 章中盤に、9 月末にイギリスに向かって旅立ったとある。終盤では、12 月下旬にイギリスに着いたとある。（“latter days of December, that I first saw the white cliffs of Britain.”）また、第 19 章でロンドンに数ヶ月滞在し、3 月 27 日（翌年）にロンドンを立っている。順当にいけば、1796 年 3 月 27 日となる。

時間標識 14：オックスフォードでの清教徒革命への回想

第 19 章で、ロンドンを発った後、オックスフォードにヴィクターが立ち寄った際、チャールズ一世が処刑された清教徒革命（1642 年）について触れ、それから 1 世紀半以上経った事が記されている。（“From thence we proceeded to Oxford. As we entered this city our minds were filled with the remembrance of the events that had been transacted there more than a century

and a half before. It was here that Charles I had collected his forces.”）

従って、第 19 章での年代は 1792 年以降となると J・J・ルセルクルは主張している。（廣野由美子『批評理論入門』もこれに触れている）。

しかし、ルセルクルはヴィクターが言及しているのは清教徒革命（1642）と主張しているが、オックスフォードに着いた時にチャールズ I 世の死と絡ませながらの発言である為、清教徒革命後に、チャールズ I 世がオックスフォードで軍勢を集めた、最後の戦い（Siege of Oxford）の 1646 年 4 月頃の事だとも取れる。その場合、それから 150 年後は、1796 年 4 月以降となる。

ヴィクターは 1796 年 3 月 27 日にロンドンを発っているので、オックスフォードに着いたのは 4 月頃だと考えられ、こちらの方が適していると考ええる。

時間標識 15：怪物の伴侶の破壊

19 章で、伴侶の創造を行うオークニー諸島に 7 月末に着く予定としている。その後、20 章にて、ヴィクターが怪物の伴侶を完成間近になって破壊する。その際に、3 年前に怪物を作り上げたことと記述している。1793 年 11 月に怪物を創造したとすれば、1796 年 11 月以降となる。

また、冒頭に、日が沈み月が登ろうとする夕方に、ヴィクターは実験室にいたとある。

（“I sat one evening in my laboratory; the sun had set, and the moon was just rising from the sea.”）

一般的に、満月は日没と同時に出る為、満月から数日経った頃から、下弦の月までの頃だと思われる。月齢から考えると、1796 年 11 月 15 日満月から、21 日下弦の月の間に伴侶が破壊されたと推測できる。

後述するように、怪物が生まれたと考えられる 1793 年 11 月 16 日から、ちょうど 3 年に当たる 1796 年 11 月 16 日に伴侶が破壊された可能性もある。

時間標識 16：ヘンリー殺害容疑によるヴィクターの投獄

21 章終盤で、ヘンリーが怪物に殺され、容疑をかけられたヴィクターが三か月間、監獄に閉じ込められた。22 章で、ヴィクターが釈放され、スイスに帰るためにパリに滞在している時に、エリザベスの手紙が届く。

その日付は、5月18日である。従って、ロンドンを経た3月27日から最低一年は経っている事が分かる。おそらく、1797年の事である。

時間標識 17：エリザベスの結婚と死

22章で、エリザベスから手紙を貰った約一週間後、ヴィクターは故郷に帰る。そして、同日にエリザベスとの結婚を10日後に行う事が記されている。つまり5月18日の17日後なので、6月4日以降である。エリザベスが殺された際に、怪物と月が見えたという記述があるので、「月のある日」である。1796年6月4-23日がその条件を満たしている。ちなみに満月は6月9日であり、手紙が届く際の日数等も含めると、ちょうど良い日時となる。

時間標識 18：ヴィクターの発狂

23章で、エリザベスと父の死後、ヴィクターは狂ってしまい、何ヶ月か監獄に入れられる。

（“For they had called me mad, and during many months. . .”）

その後、釈放されてから1ヵ月経って（“about a month after my release”）、判事に事件について話すが認められない。

この時点で、最低3ヶ月は経っている事が分かる。エリザベスの結婚があったとされる6月4日から3ヵ月後は9月4日である。一方、ウォルトンがヴィクターを発見するのは、8月1日である。その為、エリザベスが亡くなった同年に、ウォルトンに会う事は不可能である。この間に、1年以上は経過しているため、ヴィクターがジュネーヴを去るのは、1798年以降となる。

時間標識 19：ヴィクターのジュネーヴ出立

24章で、ジュネーヴに戻り引きこもっていたヴィクターが、家族の墓の前に現れた怪物に復讐するため故郷を捨てて、追跡を始める。ジュネーヴを去った時期については不明だが、ヴィクターが去った後に、フランス共和国のジュネーヴ侵攻（1798年3月）及びヘルベルティア共和国の建国が起きなければ矛盾が生じるというノーラ・クルックの論を廣野は引用している。

しかしながら、第23章の最後で、ヴィクターは判事

るので、ジュネーヴが占領されてもほとんど関心を抱かなかった可能性もある。現に唯一の生き残りの家族であるアーネストについて、世話をされたとも、どこかに行ったとも記述が全く存在しない。

従って、1798年3月のジュネーヴ侵攻の混乱時や、その後に去った可能性も充分考えられる。マルキ・ド・サドの『ジュスティース』と原作の関係性は多くの文献で指摘されているが、ヴィクターにサドの影響を見るのであれば、サドがフランス革命前に投獄され、革命後の1790年に釈放された様に、ヴィクターも、ジュネーヴの統治機構が劇的に変わった際に釈放された可能性がある。

平時であれば、むしろ、アーネストか世話役の誰かが引き留めるはずである。それが無いのは、占領により周囲が混乱していたと考えられる。

確実に言えるのは、ヴィクターが正気を保っていたエリザベスの結婚前までは、ジュネーヴ侵攻はなかったということである。その為、この時間標識については、1797年以前にヴィクターがジュネーヴを去ったという条件は守る必要がないと考える。また、丸い月に照らされて怪物の醜い姿が見えたとある事から、ヴィクターが満月の夜にジュネーヴを出発した事は確実にある。

時間標識 20：ヴィクターの怪物追跡行

ヴィクターは怪物を何か月も追いかけたと言っている。（“I pursued him, and for many months this has been my task.”）

ここから、最低数ヶ月以上、怪物を追いかけている事が確認できる。単純な直線距離で、ジュネーヴからアルハンゲリスクまでは3500kmほどある。馬で1日30km移動したとしても、4ヶ月近くかかる道のりである。実際には更に長い間、追いかけてきたと推測される。

24章で、怪物を追いかけて、ユーラシア大陸から北極に移動した約3週間後に、ウォルトンに発見されたとある。つまり、7月頃頃には、北極に辿り着いたと思われる。

時間標識 21：ヴィクターの死と怪物の最期

最後の、ウォルトンの手紙（9月12日付）より、おそらく9月11日の深夜頃、ヴィクターは死亡したと

思われる。その翌日 9 月 12 日に、ウォルトンの前に怪物が現れ、北極の果てへと消えて物語は終わる。これは、1799 年の事だと考えられる。

時間標識の矛盾点

日付と曜日の組み合わせのずれ

作中で日付と曜日が示されているのは、時間標識 3: ヴィクター発見時と時間標識、9: ウィリアムの死、の二つだけである。

当時から現在まで一般に用いられているグレゴリオ暦では、日付と曜日の組み合わせが年ごとに異なる。その為、大まかな年代がわかれば、具体的な年が特定できる。

他の時間標識より、物語の中心となっている年代は 1790 年代である。これを満たすのは、以下の組み合わせである。

1795/5/7: ウィリアムの死

1797/7/31: ウォルトンによるヴィクターの発見

この間に、怪物の伴侶の創造未遂、エリザベスの死、ヴィクターによる怪物の追跡など、多くの出来事が起きている。

そして、レオナルド・ウルフが指摘している様に、これらの出来事は 2 年 3 か月では収まらず、両者を同時に満たそうとすると多くの時間標識から矛盾する (333-34)。

実際の 1799 年 7 月 31 日は水曜日であり、時間標識の 7 月 31 日、月曜日とは、曜日の関係では二日ほどのずれが存在している。

この矛盾の原因を、作者メアリーの単純なミスと考える事は容易である。しかし単純なミスとしては、初版の時点で、7 月 31 日、月曜と、「老水夫の歌」の矛盾した時間標識が存在しており、その後、アーネストの描写などについて編集を行った、第三版においても修正されていない点が疑問である。

矛盾が生じると分かっているがメアリー自身が生まれ、母が死んだ 1797 年 8 月末から 9 月をどうしても、最後に持っていきたかったからかもしれない。

しかし、ここは若干こじつけではあるが、作者が意図的に矛盾を生じさせた可能性を考える。

曜日のずれの原因

メアリーがあえて曜日をずれさせた要因としては以下の三つが考えられる。

1. 白夜によるずれ (ずれ 2 日)
2. 地球の自転によるずれ (ずれ 2 日)
3. ユリウス暦のずれ (ずれ 1 日) (他の要因が必要)

1. 白夜によるずれ

北極探検中に、ウォルトン達は、太陽が一日中沈まない白夜に遭遇したと考えられる。太陽が沈まない為、実際には 1 日 (24 時間) より経っているのにも関わらず、日付は変えて曜日はずらしたなどの可能性がある。

白夜は確かに極地方でしか見られない珍しい現象ではあるものの、北極海だけでなく、サンクトペテルブルクなどの町でも見られるため、何らかの対処はしていると思われるので要因としては弱い。

2. 地球の自転によるずれ

地球の自転によって、世界各地の時間 (正確には太陽の見える位置) が異なる事は現在では常識だが、メアリーが執筆した当時はまだ常識とまでは言えなかったはずである。

しかし、16 世紀のマゼランの世界一周航海の際に、世界一周した船内と戻って来たスペインの日付のずれが発覚し、ローマ教皇に使者が出される騒ぎになった。この影響を受けたのが、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1820 年にメアリー読了)。ここにも、日付が 1 日ずれる描写がある。また、『ロビンソン・クルーソー』の反響を受けたスウィフトの『ガリヴァー旅行記』にも日付のずれに関する記述が見られる。出版順は逆であるが、メアリーは『ガリヴァー旅行記』を『フランケンシュタイン』執筆中の 1816 年に読んでおり、こちらから間接的に影響を受けたのかもしれない。

加えて、ニュートンも地球の自転を支持している。(厳密な地球の自転の証明はフーコーの振り子まで待たなくてはならないが。) ニュートンらの自然哲学を学んでいた夫パーシー・シェリーを通して、メアリーがマゼランの世界一周旅行における日付のずれを知り、意図的に入れた可能性がある。

実際に変わるのは、曜日ではなく日付であるため、曜日と日付の組み合わせは変わらない。しかし、当時の作者及び一般大衆にそこまでの知識がなかったかもしれない (日付変更線は 1844 年制定)。

但し、地球上では日付のずれが起きるのは一日であるため、二日ずれている原因としては根拠が弱い。

3. ユリウス暦によるずれ

現在、世界で一般的に用いられるグレゴリオ暦ではあるが、1582年の制定以前は、ユリウス暦が用いられており、その後、徐々にグレゴリオ暦が採用された経緯がある。スイスは17世紀の初めまでにグレゴリオ暦を採用し、イギリスは1752年に採用している。しかし、ロシアは物語の舞台となる1700年代の間は依然として、ユリウス暦を使用していた。グレゴリオ暦とユリウス暦では、11日程度の日付のずれが存在する。

時間標識9：ウィリアムの死は、スイス・ジュネーヴでの出来事であり、グレゴリオ暦だと考えられる。

一方、時間標識3：ヴィクター発見時は、ウォルトンがロシアで準備をしている際に現地で乗組員を募集しているため、あえてユリウス暦を採用した可能性が考えられる。

実際に、ユリウス暦では、1799年7月31日は日曜日である（グレゴリオ暦では、1799/8/11）。これだけでは、1799年7月31日が月曜日という条件を満たせてはいない。その為、白夜や地球の自転によるずれが一日必要となる。

矛盾点の解釈

これらを踏まえた上で、もう一度二つの時間標識を考えると、時間標識9：ウィリアムの死は、グレゴリオ暦が既に定着したジュネーヴでの出来事であり、信頼できる。

一方、時間標識3：ヴィクター発見時の方は、ロシアから出港のためにユリウス暦を採用している可能性があり、更に航海による白夜や地球の自転によるずれなど、不確定な要素が多々含まれている。前者の方が後者より信頼性が高いと考えられる為、前者を採用し、後者を無視した。

1793年11月に怪物誕生、1799年9月に物語が終了する。ヴィクターは27-8歳で死去。28歳のウォルトンとほぼ同い年である。怪物は6才になる直前で北極の果てへと消えている。

矛盾点は、時間標識3：ヴィクター発見時と、時間標識5：引用作品の時代錯誤の二点のみである。これ

らについて、少し強引な解釈をする事で、解消する事が出来た。

結論—怪物の誕生日の日付の推定

ここまでの考察で、物語の年表の枠組みを作り、怪物の生年月を1793年11月と特定した。しかし、怪物が何日に生まれたかについては原作中では明確には示されていない。原作中では、怪物はその生命を呪われる事はあるが、祝ってもらう事はないので、もちろん誕生日を祝ってもらう事もない。

手掛かりは、怪物が生まれた次の日に見た月である。怪物は生まれた後、一度眠りにつき、夜中に目覚めて月を見ている。特に月の形状は書いていないが、怪物、ヴィクター共に月の光の印象を持っているという事は、明るい月だと思われる。

また、その後の文章で、「数日経つと月の光が少なくなつて暗くなり、月が完全に消え再び出るまで森にいた」とある。つまり、怪物が見た月は、満月以降の欠けていく月であり、1793年11月17-30日の期間に絞り込める。（月の満ち欠けの形状は地球上では変化しないが、怪物が生まれたインゴルシュタットの時差UT+1で計算する必要がある。）

怪物の見た月は満月か？

ここからは個人的な解釈となるが、以下の根拠より、怪物の誕生日は満月の前日だったという説を取りたい。まず原作中では、以下に示すように、月の光は、ヴィクターと怪物が対峙する時に何度も出ている。

- ・怪物創造の場面
- ・怪物が無人となったド・ラセー家に火をかける場面（月が沈んだ直後から）
- ・ヴィクターが伴侶の創造をやめる場面
- ・怪物が婚礼の夜にエリザベスを殺す場面
- ・ヴィクターが墓で復讐を誓う場面（明白に丸い月と記載）

怪物が生まれたシーンで、月に対して原作中唯一の脚注をつける辺り、メアリー・シェリーもかなりこだわっていると考えられる。丸い月、すなわち満月だと

厳密に言われているのはジュネーヴの墓の前で現れる所である。

満月のイメージ

月の潮汐力はニュートンによって説明されており、ヴィクターは幼少期の回想でニュートンの砂辺の比喻を引用するなど影響が見られる。また、エラズマス・ダーウィン等主催のルナ協会では、満月に会議を開いていた。真偽のほどは不明だが、満月の夜に出産が多かったり、狂気が蔓延し、悪魔的儀式が行われるなどの噂も当時から存在していた。メアリー・シェリーが、月及び、満月に対して、何らかの意識的なイメージを持っていた事をうかがわせる。

原作者との関係

原作者メアリー・シェリーとの関係でいえば、二週間足らずで早逝した彼女の長女が生まれたのは、1815年2月22日で満月の前日である。

怪物の肌が、新生児黄疸の様に黄色い点や両者とも名前が付けられていない点といい、満月の前日に生まれた長女と怪物をどこかで同一視していた可能性もある。

その後、長男ウィリアムや次女クレアラなどが相次いで亡くなっているが、1818年1月の『フランケンシュタイン』初版出版時に亡くなっているのは長女のみ。

また、バイロンがメアリーたちにそれぞれ怪奇話を書く事を提案した有名なディオダディ荘の怪奇談義も、1816年6月10日の満月の頃に始まったといわれている。更に、メアリーが怪物の発想を思いついたのは、6月16日の午前2時から3時頃だと考えられている。メアリー、ポリドリらの手記や手紙等の文献では正確な日時に矛盾が生じていたが、テキサス州立大学物理学教授のDonald Olson等が、実際にディオダディ荘に行って月の満ち欠けを調べて、日時を特定した。偶然だとは思われるが、1793年11月の満月の前日も同じ16日である。

従って、1793年11月の満月の日は17日であり、怪物の生年月日はその前日の1793年11月16日となる。日付の特定については、一部恣意的な判断に基づくところがあるが、時系列については出来るだけ論理的整合性を維持することに努めた。

他年表との比較

ルセルクルの同書によると、ヴィクターが亡くなるのが約25歳で、怪物を創造したのは4年前の21歳頃と計算している。しかし、これには矛盾がある。怪物を創造したのは21歳頃で正しい。怪物を創造してから、伴侶を創造しかけて壊すまでが3年。その後の経緯を見ると、更に3年弱の間に、エリザベスの死やヴィクターの発狂、ヴィクターと怪物の北極までの逃避行がある。合計では6年弱であり、したがってヴィクターは約27歳で死んだと思われる。

ケネス・ブラナー監督の映画『メアリー・シェリーのフランケンシュタイン』でも、具体的な年月が明らかにされている。

冒頭のウォルトンの北極探検が1794年。1773年、幼少期にエリザベスとの出会い。ヴィクターがインゴルシュタットに学びに行くのが1793年。

幼少期の段階で踊っているのが最低4、5歳で、それが73年の事だから北極ではヴィクターは25、6歳となり原作とほぼ同じである。

ただ、怪物を創造してから北極までが最長でも1年と11ヶ月（1793年～1794年なので）となっており、これは短い。原作では約4年だと考えている。

ただその点を除けば、大体原作の時間標識は満たしているのでおおよそ正しい。その設定に比べるとかなり、正しい方と言えるだろう。インゴルシュタットでの勉強と怪物の誕生後の物語を圧縮している。公開が1994年だったので、ちょうど200年になる1794年に合わせたのだろうか。

史実との関係

怪物が生まれたとされる1793年は、フランスでは1789年に勃発したフランス革命が進行していた時代である。同年6月には、人民主権や奴隷制の廃止などを盛り込んだ1793年憲法が制定された。フランス革命暦が制定されたのも、同年11月24日である。（共和国1年の元日は、グレゴリオ暦1792年9月22日）。死から復活したイエスの誕生を基準に西暦が制定された様に、フランス革命暦という新しい暦と共に、死から復活した怪物が誕生したと考えるのは強引だろうか。

その一方で、革命の影の部分も大きくなっていた頃であり、1月にルイ16世が処刑され、10月には王妃マリー・アントワネットも処刑されている。更には、11月3日にはオランブ・ドクージュ、8日にロラン夫人も処刑されている。そして、11月10日には、ノートルダム聖堂でエベール派による理性の祭典(culte de la Raison)が行われている。この祭典は、脱キリスト教、無神論的な運動である。偶然の一致だろうが、怪物の誕生日が11月16日だとするならば、天地創造の神話をなぞる様に、無神論の祭典から六日目に人造人間が誕生したという事になる。

また、フランス革命の影響は、メアリーの周囲の人々にも及んでいる。メアリーの父ウィリアム・ゴドウィンの『政治的正義』(*Political Justice*)も1793年に出版された。この本はイギリスのフランス革命とも呼ばれ、サウジー、コールリッジ、ワーズワースらが影響を受け、そして『フランケンシュタイン』の冒頭にも引用されている。

一方、メアリーの母であるメアリー・ウルストンクラフトは、1792年、『女性の権利の擁護』を出版している。そして、1793年からはフランス革命の様子を見るために、パリにわたっている。パリではギルバート・イムレイと恋に落ち、1794年5月に生まれるメアリーの異父姉ファニー・イムレイを身ごもっていた。

メアリーがどこまで厳密に物語の時系列を作っていたかは定かではない。怪物が生まれた年が1793年である確証はないものの、ヴィクターが怪物を創造した時代は、メアリーの父母がそれぞれの怪物たちを生み出した時代であり、メアリー(1797年生)及びパーシー(1792年生)が、怪物と同世代だという意識はメアリーの中にあっただといえるだろう。

参考文献

- Branagh, Kenneth (監督) *Mary Shelley's Frankenstein*, 1994.
- Curran, Stuart. *Frankenstein; or, the Modern Prometheus*.
(<http://knarf.english.upenn.edu/index.html>)
Online.
- Olson, Donald W., et al. "The Moon and the origin of Frankenstein." *Sky & Telescope* 122.5 (2011): 68-74.
- Shelley, Mary. *Frankenstein or The Modern Prometheus*. Ed. Marilyn Butler. Oxford University Press, 1994.
- Wolf, Leonard. *The Essential Frankenstein*. New York: Plume, 1993.
- 小野俊太郎『フランケンシュタイン・コンプレックス』青草書房, 2009.
- 小野俊太郎『フランケンシュタインの精神史: シェリーから『屍者の帝国』へ』彩流社, 2015.
- 久守和子、中川僚子 編著『シリーズ もっと知りたい名作の世界 7 フランケンシュタイン』ミネルヴァ書房, 2006.
- 廣野由美子『批評理論入門—『フランケンシュタイン』解剖講義』中公新書, 2005.
- 廣野由美子『NHK 100 分 de 名著『フランケンシュタイン』』NHK出版, 2015.
- フライシャー, リアーノ『フランケンシュタイン』(Branagh 監督映画の小説版) 角川書店, 1994.
- ルセルクル, J. J. 『現代思想で読むフランケンシュタイン』講談社選書メチエ, 1997.
- 月齢カレンダー HP
(<http://koyomi8.com/moonage.htm>), Online.
- グレゴリオ暦、ユリウス暦変換
(<http://maechan.net/kanreki/>), Online.

『フランケンシュタイン』年表 宇木権一作成

西暦	月	歴史上の出来事	ヴィクターの周囲の出来事	怪物についての出来事
1769	8	ナポレオン誕生		
1770	4	ワーズワース誕生		
1771		ブリタニカ百科事典刊行	1771 年頃ヴィクター誕生	
	8	ウォルター・スコット誕生		
1772		フランス、百科全書刊行		
	10	コールリッジ誕生		
1773		ボストン茶会事件		
1774		ラボアジエ、質量保存則を提唱。		
	9	ゲーテ『若きウェルテルの悩み』出版		
1775		メスメル、動物磁気説を主張。		
	4	アメリカ独立戦争開始		
	12	エラズマス・ダーウィン等、ルナ協会設立		
1776		ジョン・ハンターが世界初の人工授精に成功		
		アダム・ヴァイスブト、イルミナティを設立		
		クック、北西航路探索に出発		
	7	アメリカ独立宣言		
1777	4	ガウス誕生		
1778	5	ヴォルテール死去	1778 年頃、アーネスト誕生	
	7	ルソー死去		
	12	ハンフリー・デービー誕生		
1779		クック、ハワイにて死亡		
1780	11	ガルヴァーニ、動物電気説を発表		
1783		アメリカ独立戦争終結。		
		8 フィートの巨人チャールズ・バーン死去。死体は、ジョン・ハンターの手にも。		
1784		メスメル、ラボアジエ、フランクリンらから動物磁気について調査を受け、偽物の烙印を押される。	1784-5 年ヴィクター13-15 歳頃、錬金術、占星術に没頭するが間違いだと気付く。	
1785		イルミナティ、異端とみなされ、壊滅。		
1788	1	バイロン誕生	1788 年頃 ウィリアム誕生？	
1789		ラボアジエ『化学原論』出版		
	7	フランス革命勃発	1789 年、ヴィクターの母死去。 ヴィクター、インゴルシュタット大学入学	
	8	フランス人権宣言	2 年ほど自然哲学(科学)を勉強	
1790	4	ベンジャミン・フランクリン死去		

西暦	月	歴史上の出来事	ヴィクターの周囲の出来事	怪物についての出来事
1791		サド『ジュスティーヌ』出版 トマス・ペイン『人間の権利』出版 オランブ・ド・クージュ『女性および女性市民の権利宣言』出版	生命創造のインスピレーションを得て、怪物の創造に励む	
	7	バーミンガム暴動。プリーストリーの家放火される。		
	8	ハイチ革命		
	9	マイケル・ファラデー誕生		
1792		メアリ・ウルストンクラフト、『女性の権利の擁護』出版		
	8	パーシー・シェリー誕生		
1793		ウィリアム・ゴドウィン、『政治的正義』出版		
	1	ルイ 16 世処刑		
	3	ヴァンデの反乱		
	3	革命裁判所設立		
	6	1793 年憲法制定		
	7	マラー刺殺		
	10	マリー・アントワネット処刑、ジョン・ハンター死去		
	11	オランブ・ド・クージュ処刑		
		ノートルダム大聖堂にて、エベール派による理性の崇拜		
		フランス、グレゴリオ暦から革命暦に変更	11/16 怪物を創造	11/16 怪物誕生
	12	ナポレオン、トゥロン攻囲戦で勝利	ヴィクター、怪物を創造したショックで寝込む。	インゴルシュタットの森で過ごす
1794	1			ド・ラセー家の小屋に 隠れ住む
	3		3/18 エリザベスから手紙が届く	
	4		ヴィクター、病から回復。	
	5	ラボアジェ処刑		怪物、『失楽園』、『対比列伝』、『ウェルテル』を拾って読む。
	6	ロベスピエール主導による最高存在の祭典		
	7	テルミドールのクーデター	クラークヴァルと勉強などを して過ごす。	
	8			ド・ラセー家に拒絶される。無人となった家に放火
	9	エコール・ポリテクニーク設立		
	10			
	11			ヴィクターに会いに、ジュネーヴに向かう
	12		スイスに帰ろうとしたが、ダラダラと長引く。	
1795	1			
	2			
	3			
	4		スイスに向かい始める。	

西暦	月	歴史上の出来事	ヴィクターの周囲の出来事	怪物の出来事	
1795	5	革命裁判所検事フーキエ・タンヴィル処刑 メアリー・ウルストンクラフト自殺未遂	ウィリアム死亡。	ウィリアム殺害。ジュスティースに罪を着せる	
	6		ジュスティース処刑		
	7				
	8		旅に出て、怪物と遭遇		ヴィクターに会い、伴侶を要求。
	9		月末にイギリスに向けて旅立つ。		
	10	ヴァンデミエールの反乱 ジョン・キーツ誕生	イギリスに向けて移動。		
	11				
	12				
1796	1		ロンドンに数ヶ月滞在	ヴィクターの伴侶創造を影から監視。	
	2				
	3	ガウス、正 17 角形が作図可能であることを証明	27 日にロンドンを発つ。		
	4		オックスフォード滞在。チャールズ 1 世に言及。		
	5	エドワード・ジェンナーが種痘を実施			
	6				
	7		オークニ諸島に到着？		
	8		怪物の伴侶の創造を始める		
	9				
	10				
	11		怪物の伴侶を破壊。ヘンリーが怪物に殺される。	伴侶を破壊された怒り からヘンリー殺害	
	12				
1797	1		ヘンリー殺害疑惑で、3ヶ月監獄で過ごす。		
	2				
	3				
	4		釈放されスイスに向かう。		
	5		5/18 エリザベスから手紙が届く。		
	6		スイスに帰り、エリザベス と結婚。エリザベス死亡。父も死亡。	エリザベス殺害。	
	8	メアリー・シェリー誕生			
	9	メアリー・ウルストンクラフト死去			
	10	カンボ・フォルミオ条約			
	1798	1			マルサス『人口論』出版 ゴドウィン『メアリー・ウルストンクラフトの思い出』出版
2					
3		フランス共和国がスイスに侵攻			
4		スイス、ヘルベルティア共和国に変更	釈放から1ヶ月後、判事に真相を話す すが受け容れられず、引きこもる		

西暦	月	歴史上の出来事	ヴィクターの周囲の出来事	怪物の出来事
1798	5	ナポレオン、エジプト遠征出発	スイスを去り、怪物を追いかける。	
	6		怪物を追いつける。(最低 2 ヶ月以上)	
	7	ナポレオン、ピラミッドの戦いで勝利		
	8			
	9			
	10	ワーズワース・コールリッジ『リリカル・バラッズ』出版		
	12		ウォルトン、サンクトペテルブルクで北極探検の準備	
1799	1		怪物を追いつける。 (最低 2 ヶ月以上)	ヴィクターに追われる
	2			
	3			
	4			
	5			
	6			
	7		北極で怪物を追いつける	
	8		8/1 ヴィクター、ウォルトンに発見される。	
	9	ナポレオン、エジプト遠征から帰還 第二次チューリッヒの戦い	9/11 ヴィクター死亡。	9/12 怪物、北極の果てに消える。
	11	ナポレオンによるブリュメールのクーデター		
	12	Royal Institution of Great Britain 設立		

Royal National Theatre, “Frankenstein”

Kobe Asahi Hall, Dec. 25, 2016

Reviewed by OKA Hayato

ナショナル・シアター・ライブ、『フランケンシュタイン』を観て

岡 隼人

*Creature: Don't leave me. Don't leave me alone.**You and I, we are one. While you live, I live.**When you are gone, I must go too.*

— “Frankenstein” (Royal National Theatre)

2016 年は『フランケンシュタイン』にとって特別な年であった。この怪物（的小説）が産み出されてから 200 年の節目であったからだ。昨年は、北米はニューヨークにおいて 4 月 8 日から 9 日にかけて『フランケンシュタイン』生誕 200 周年を記念して研究発表の大会が開催された。シェリー研究センターにおいても、同じく 200 周年を記念して、相浦玲子氏と阿尾安泰氏を外務よりお招きして、『フランケンシュタイン』に関する興味深いご講演をいただいた。その後は、ご両名に阿部美春会長が加わり、ジュネーブ湖畔にまつわるシンポジウムが開かれた。メアリー・シェリー研究を初めて 5 年目の私はというと、2016 年の年末に三宮駅近くの神戸朝日ホールにてナショナル・シアター・ライブ (National Theatre Live) の『フランケンシュタイン』を鑑賞して 200 周年をこっそりと祝った。後にまた言及するが、それぞれ 3 時間近くからなる 2 つのバージョンを同日に鑑賞したので、その日は本当に『フランケンシュタイン』Day と言える 1 日となった。この舞台の初演は 2011 年の 2 月で、その反響ゆえに度々スクリーンで上映されてきた。

監督は知る人ぞ知るダニー・ボイル。今年続編が期待される『トレイン・スポッティング』、アカデミー賞の監督賞をはじめ数多くの賞を受賞した『スラムドッグ\$ミリオネア』、エリザベス女王がジェームズ・ボンドとパラシュート降下をする演出が話題となった 2012 年ロンドン・オリンピックの式典『驚きの島々』(The Isles of Wonder) の総合演出といった輝かしい業績を持つ。原作はもちろんメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』なのだが、舞台用にかなり改変されている (Faber & Faber から舞台版『フランケンシュタイン』のペーパーバック版が出版されている。) 改変の役を担ったのはニック・ディーア (Nick Dear) という作家であり、他にも数多くの舞台作品の執筆を行っている。主演は現在大ブレイク中のベネディクト・カンバーバッチとジョニー・リー・ミラーの 2 人で、この舞台にはカンバーバッチ=ヴィクター、ミラー=怪物版とカンバーバッチ=怪物、ミラー=ヴィクター版の 2 つのバージョンが

存在する。そして、これこそがこの舞台の最も趣向を凝らした演出の 1 つである。さらに、カンバーバッチとミラーが 2 人とも海外ドラマ版のシャーロック・ホームズをそれぞれ『シャーロック』と『エレメンタリー』の中で演じていることを思えば、両者の配役はより一層 2 重性を帯び、興味深い。『フランケンシュタイン』研究において、怪物をヴィクターの分身と見なすアプローチは数多く存在する。そんなアプローチを、今回の舞台演出では役者 2 人がヴィクターと怪物それぞれの役を各舞台で交代して演じることで、かなり鮮明に浮かび上がらせている。これは今までに制作されてきた数多くの『フランケンシュタイン』映画等の作品とは一線を画す。(注: ここから先は舞台の内容に触れるので、ネタバレ覚悟でお読みいただきたい。)

『フランケンシュタイン』を原作に忠実に描いた作品はこれまでに皆無である。この舞台に関しても、原作における重要な設定 (怪物が言葉を巧みに操ることなど) はそのままにされてはいるものの、やはり改変が所々でなされている。舞台は怪物の誕生シーンからいきなり始まる (原作の冒頭を飾る語り手ロバート・ウォルトンは登場しない。) 鮫の卵のような奇妙な形をした袋を突き破り、怪物は生まれる。四肢を痙攣させ、生まれたばかりの子牛のようなおぼつかない足取りで、2 足歩行で歩くことを覚え始める。歩く喜びを知ったのも束の間、様子を見に来たヴィクターにその醜さゆえに罵られ、捨て去られる。実験室から外へ出て、森の中を一人彷徨う怪物は人間たちに出会う。(彼がまず初めに出会うのが炭鉱で働く労働者の一団で、これは下層階級の労働者[とりわけ若者]を度々自身の作品で登場させているボイル監督らしい演出である。) そして、怪物が偶然助けた娼婦の女は彼を見るなり恐怖で逃げ出し、浮浪者たちは火を奪った仕返しに彼を棒で何度も殴りつける。

傷付いた怪物はある小屋を見つける。そこには盲目のド・ラセー翁とその息子フェリックス、そしてフェリックスの妻のアガサ (原作ではフェリックスの妹で、彼の恋人はサフィーという名のトルコ人娘) の 3 人が暮らしていた。フェリックスとアガサが畑仕事で外出

中に怪物は度々ド・ラセー翁のもとを訪ね、人間の言葉を始め、数多くの知識を授かる（原作における怪物は、ド・ラセー家の人々の生活を隣の小屋から覗き見ること、人間の言葉をはじめ数多くの知識を修得する。）この場面の演出は今舞台で最もコメディチックな部分となっている。例えば、春の訪れを喜ぶド・ラセー翁の様子を見た怪物がその理由を彼に尋ねると、ド・ラセー翁もその喜びの理由を言葉で言い表すことができずに、“Well — spring, you know! Ha Ha!” とスキップをして誤魔化す。他にも少し前まで赤ん坊同然だった怪物が彼のお気に入りの『失樂園』をこれでもかと言うほど暗唱してみたりする（その横でド・ラセー翁がその様子をボカーンとした表情で見ている）など、思わずクスッと笑ってしまう場面が続く。

こうして（ユーモア溢れる）ド・ラセー翁と親睦を深めていく怪物であった（ド・ラセー翁は原作以上の存在感を持ち、怪物の父親的な存在となる）が、やはりここは原作通りにフェリックスにその醜い姿ゆえに罵られた挙句、棒で幾度も打ち据えられる。ここで怪物を殴り殺せと夫のフェリックスに指示するのがアガサであること（原作ではアガサは気絶し、サフィーは一目散に逃げ去る）、そして、無実の怪物が息子たちによって口汚く罵られ、追い払われたことにド・ラセー翁がひどく悲しみ、“No man is a monster!” と嘆きの言葉を発する場面が舞台版にはあるのが興味深い。結局、また孤独になった怪物はド・ラセー翁の家に火を放ち復讐を遂げる。そして、怪物は自らの創造主であるヴィクター・フランケンシュタインと言う名の男を求めジュネーヴへと向かう。

場面が変わり、ジュネーヴではヴィクターの許嫁のエリザベス（アフリカ系の女優ナオミ・ハリス[最近では007シリーズのマナー・ペニー役で有名]が演じている）がヴィクターの弟のウィリアムたち（ウィリアムはアフリカ系の子役とヨーロッパ系の子役が各舞台を交互で演じている）と湖畔でかくれんぼをして遊んでいる。鬼になったウィリアムに怪物が忍び寄り、怪物は自らをヴィクターの叔父だと偽って一緒に遊ぼうと言うが、その姿ゆえに拒絶される。夜中になっても見つからないウィリアムを父アルフォンスたち（アルフォンスもまたアフリカ系の俳優ジョージ・ハリスが演じている）が松明を片手に搜索する。そんな中、一隻のボートが湖岸に打ち寄せる。その中にはウィリアムの遺体が残されていた。首に何者かによって絞殺された跡を残して…。（これは原作において、アイルランドでヴィクターの親友のヘンリー・クラヴァルが殺害された挿話で用いられた設定である。原作でボートの中にいるのはヴィクターである。ちなみに本舞台にはクラヴァルも召使いのジュスティースも登場しない。）

ウィリアムを殺したのが怪物だと確信したヴィクターはアルプスの山で怪物と対峙する。そこでの会話内容はほぼ原作通りで、怪物がパートナーとなる女性の怪物を製作するようにヴィクターに嘆願することとなる。怪物がこの地を永久に去ることと引き換えに、その願いを聞き入れたヴィクターは単身スコットランドへ向かう。この場面には、女性の怪物を作り上げる際に必要となる新鮮な死体や臓器を墓場などから盗んで

くるコメディタッチの舞台オリジナルのキャラクターが2人登場する。共にスコットランド訛りがきつく、ヴィクターの怪しげな実験を訝りながらもせつせと金のために仕事をこなす。女性の怪物を創造中のヴィクターはある幻想を見る。死んだはずのウィリアムが靴から飛び出してきて、ヴィクターに創造行為がもたらす責任を考えさせる役目を果たす。そして、幻想を見ていたヴィクターの前に怪物が突如現れる。幻想の中のウィリアムに言われた通り、怪物をもう一体作り出すことがどれほど危険なことかに気付いたヴィクターは怪物のいる前で女性の怪物を切り刻む。（女性の怪物はほぼ完成している。その姿をヴィクターは怪物に見せて彼の気持ちを煽った上で、怪物の目の前でそれを切り刻む。舞台版のヴィクターは原作以上に残酷であり、どこか共感できない存在となっている。）怒り狂った怪物はヴィクターを殺そうとするが、騒ぎを聞きつけた警官がやってきたのに気付き、婚礼の夜に再び現れると予言してその場を立ち去る。

ジュネーヴに帰国したヴィクターはエリザベスと早速式を挙げる。そしてその夜、エリザベスのベッドの中に隠れていた怪物は、ヴィクターのいない隙を狙ってエリザベスの同情を巧みに引きながら彼女を油断させた後に、突然襲い掛かり彼女を凌辱する。そして叫び声を聞いてとんできたヴィクターを見ると、エリザベスの首をねじ折って殺害する。“Now I am a man”と呟く怪物にヴィクターは銃を向けるが、なぜか発砲できない（どこか意味深でもある）。悲しみに暮れるヴィクターは怪物への復讐だけを生き甲斐に北へ北へと怪物を追跡する。長い旅の末、ヴィクターは怪物と相見える。衰弱しきったヴィクターはもはや復讐する体力気力もなく、死が間近に迫った状態である。そんな瀕死のヴィクターを見た怪物は、彼を抱きかかえ涙を流しながら創造主への愛憎混じった言葉を語り始める。そして、気付け薬として飲ませたワインが功を奏してヴィクターは息を吹き返す。こうして、創造主の復活に歓喜する怪物とヴィクターのどちらが追われる側かもはや分からない追跡劇は続くのであった…。

舞台版『フランケンシュタイン』はこうして幕を閉じる。改変があったため新鮮で楽しめた部分はあったものの、改変ゆえに原作の重要な要素が損なわれている感もある。まずは、ヴィクターと怪物であるが、決して世間の人気に流された意見ではなくヴィクターも怪物も共にカンバーバッチに軍配があるように思われる。カンバーバッチの演じるヴィクターの傲慢な態度（『シャーロック』のイメージがあるからかもしれないが…）と怪物の孤独感だけでなく、コメディチックな場面における怪物とド・ラセー翁との掛け合いは素晴らしかった。他のキャストについては、今映画界でも問題となっている（人種的）多様性に配慮しているのか、どうもアフリカ系のアルフォンスとエリザベスはしっくりこなかった。特に、アフリカ系のアルフォンスとヨーロッパ系のヴィクターが親子のような感じが全くないのである。そのため、父子の確執といった重要な要素が上手く表現できていない。父子関係で言うと、ヴィクターと怪物の関係もド・ラセー翁と怪物の関係を強調した分、希薄になっており、最後の場面で怪物が涙するのがどこか突飛な感じがしてならなか

った。この点、原作はやはりヴィクターと怪物の関係が軸に据えられ、しっかりと丁寧に綴られているため、怪物が最後に見せる悲しみと彼の嘆きの言葉は我々読者の胸に突き刺さる。舞台版の批判が多くなったが、舞台版において素晴らしかったのは、やはりド・ラセー翁が怪物を一から教育していく場面である。両者のセリフの掛け合いと怪物が言語と知識を少しずつ修得していく様の演技が絶妙である。そして、原作ではどこかあやふやで、様々な解釈が可能とされている女性の怪物の場面とエリザベスが怪物に殺害される場面を明確な形で提示した勇氣に拍手を送りたいと思う。

2016年は『フランケンシュタイン』生誕200周年を記念した年となったわけだが、2017年も引き続きその話題性は尽きない。日本国内では綾野剛が怪物役で主演を務める『フランケンシュタインの恋』(タイトルからして原作完全無視であろうが…)というドラマが4月より放送される。そして、来年は出版200周年という節目を迎える。『フランケンシュタイン』はまだまだ様々な可能性を秘めた「成長」し続ける怪物(的作品)である。ただ、私としては一度でいいので原作に忠実な映像化作品を観てみたいのが本音である。と言うのは原作を超えた映像化作品を未だに見たことがないから……。

(大阪歯科大学)

Works and Events Cited

NY6 Think Tank 主催

“The Modern Prometheus; Or, Frankenstein”

開催地：ハミルトン・カレッジ (Hamilton College, Clinton, New York)

開催日：2016年4月8、9日

URL：<http://www.ny6thinktank.org/the-modern-prometheus-or-frankenstein.html>

『フランケンシュタイン』(*Frankenstein*)

ロイヤル・ナショナル・シアター (Royal National Theatre, 初演：2011年2月5日)

原作：メアリー・シェリー (Mary Shelley)

監督：ダニー・ボイル (Danny Boyle)

脚本：ニック・ディアー (Nick Dear)

出演：ベネディクト・カンバーバッチ (Benedict Cumberbatch)：ヴィクター・フランケンシュタイン&怪物

ジョニー・リー・ミラー (Jonny Lee Miller)：

ヴィクター・フランケンシュタイン&怪物

カール・ジョンソン (Karl Johnson)：ド・ラセー翁

ジョージ・ハリス (George Harris)：M・フランケンシュタイン

ナオミ・ハリス (Naomie Harris)：エリザベス・ラヴェンザ

『日曜ドラマ フランケンシュタインの恋』(2017年4月～、日本テレビ)

チーフプロデューサー：伊藤響

脚本：大森寿美男

主演：綾野剛：怪物

出演：二階堂ふみ、津軽継実、柳楽優弥、稲庭聖哉、川栄李奈、室園美琴

Dear, Nick. *Frankenstein*. By Mary Shelley. (舞台脚本、ペーパーバック版) London: Faber & Faber, 2011. Print.

Differential and Integral Time of Frankenstein:

Reviewing Victor Frankenstein's Progenies

宇木権一 / UKI Kenichi

発表からもうすぐ 200 年を迎えるメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』は時代と共に数多くの派生作品を生み出してきた。それらの作品の中から、過去、現在、未来という時間軸により差異 (Differential) と統合 (Integral) の観点から概観する。これにより、新たなフランケンシュタイン創造につながるヒントが見つかるかもしれない。

Past (t<0)

『フランケンシュタイン』が書かれた 18 世紀初頭の過去を舞台にした作品に、ピーター・アクロイドの *The Casebook of Victor Frankenstein* がある。この作品では、パーシー・シェリーとヴィクター・フランケンシュタインがオックスフォード大学の同級生の設定だ。原作のヴィクターは 1770 年代前半生まれと推測されるので、世代としてはむしろワーズワースやコールリッジの方が近く、シェリーより 20 歳ほど年長になる。

著者は、ウィリアム・ブレイクやディケンズの伝記も書いた専門家だけあって、『ジキル博士とハイド氏』のモデルである外科医ジョン・ハンターのエピソードや、王立研究所でのデービーの科学実験、コールリッジの『詩の原理』の講演といった史実とヴィクターの架空の怪物創造の研究を上手く絡ませている。

終盤で明らかになる、ヴィクターが創造した怪物の正体も現実的な解釈だろう。

一方、ティム・パワーズの *The Stress of Her Regard* (邦題：石の夢) は、同時代が舞台ながら、シェリーだけでなく、キーツやバイロン等のロマン派詩人が、怪物ネフィリムと戦うファンタジー色の強い小説だ。

敵であるネフィリムは、メアリー・シェリーのフランケンシュタインの怪物、ポリドリとバイロンの吸血鬼、キーツの蛇女レイミアを融合した存在である。この幻想的な設定に、ロマン派詩人が若くして亡くなった事や、キーツの “Here lies One whose Name was writ in Water” の墓碑銘、シェリーの溺死と燃え尽きない心臓などの史実を綿密に絡ませる事でロマン派詩人の生きた時代を魅力的に描いている。

また著者のパワーズは、K・W・ジーター、ジェイムズ・P・ブレイロックと共に、サイバー・パンクに対抗して、スチーム・パンクという SF のサブジャンルを作り上げている。

サイバー・パンクを造り上げたウィリアム・ギブスンとブルース・スターリングによる『ディファレンス・エンジン』も、スチーム・パンクを有名にした作品だ。こちらの世界では、電気の代わりに蒸気機関と、チャールズ・バベッジの階差機関 (Difference Engine) が発展しており、バイロンの娘エイダはプログラマーとな

り、シェリーは過激派として腐敗したバイロンの統治に抗うなど、一風変わったロマン派詩人の姿も垣間見られる。

Present (t=0)

現代を舞台にした、ディーン・R・クーンツのフランケンシュタインシリーズは、刑事もののミステリーの体裁でありながら、人造人間が暗躍する SF 要素を持っている。

こちらでは、原作のヴィクターと怪物の双方が現代まで生きており、ヴィクターは、時代時代の独裁者達に協力し、人造人間を造り各界の重要人物と入れ替える事で世界征服を目論むマッド・サイエンティストと化している。

一方、原作同様にヴィクターの周囲の人々の命を奪った事を後悔した怪物は、北極の果てで自殺せずにサーカスで働いた後チベットの寺院で平穏な日々を過ごしていたが、刑事と共にヴィクターの野望を阻止する為に戦うヒーローとなる。

原作では名前のなかった怪物は、自らデュカリオンと名乗る。ギリシャ神話のデュカリオンはプロメテウスの息子で、ゼウスの起こした大洪水でも生き残り、人類の先祖となった存在であり、ここにも著者のこだわりが垣間見える。

このシリーズでは、映画や他の多くの派生作品と異なり、ヴィクターが悪、怪物が善という構図である。著者自身、幼少期にホエール版映画を見てから怪物に暴力を振るう父を重ね合わせて怪物に追われる悪夢を 30 歳頃まで見るほど、怪物に恐怖を抱いていた。そうありながら、怪物の善悪が逆転したのは、悪役である『失楽園』のサタンが、シェリーやバイロンによってヒーローとして再評価された様に、ヴィクターに復讐する怪物の姿に、父に抗う著者の理想像を見たからだろうか。

また、シリーズ第三巻冒頭には、「科学万能主義による人間性の破壊に以前から気づいていた故 C・S・ルイスにこの本を捧ぐ」と記されており、『ナルニア国物語』で有名な小説家でキリスト教伝道者でもあったルイスの主張する科学否定に賛同し、ヴィクターの方は完全な悪として描いている。

科学の影にのみ焦点を当て、光を描かなかった事で、原作にあったヴィクターと怪物、あるいは科学と人間性の複雑な二面性を失ってしまっている。

この作品にはヴィクターの野望の為に創られた、警察官、神父、ヴィクターの妻役などの役割を担う人造人間が登場する。機械の様にヴィクターの命令に従う彼らだ

ったが、徐々に自我と苦悩が生じて様々な方法でヴィクターの支配から逃れ始める。

そこに描かれているのは人造人間の人間的な苦しみであり、その姿は、「はやく人間になりたい」と願い苦しむ『妖怪人間ベム』に連なる *Modern Monsters* と呼べるだろう。

Future (t>0)

文学の一ジャンルである SF は、数多くの未来を予測して描いてきた。

SF において『フランケンシュタイン』は、ブライアン・オールディスの『十億年の宴』を始めとして、H・G・ウェルズやジュール・ヴェルヌを抜いて、SF の起源という地位を与えられている。またオールディスも、メアリー・シェリーの生きた 18 世紀と未来を行き来する作品『解放されたフランケンシュタイン』を記している。

フランケンシュタインのテーマは、カレル・チャペックの『R.U.R』でロボットの語が造られ、アイザック・アシモフのロボットもので描かれたフランケンシュタイン・コンプレックスとその防止策としてのロボット工学三原則、日本では手塚治虫の『鉄腕アトム』などの大衆作品へと引き継がれていった。

その後、P・K・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢をみるか』では、人と怪物(アンドロイド)の違いは曖昧となる。更に、サイバー・パンク後は、人間と機械の融合が積極的に描かれる様になった。

派生作品においても、ヴィクターと怪物の関係は、時間の経過とともに複雑に絡まっていく様相を見せている。

このテーマをハード SF 的に追求した一つの解が、グレッグ・イーガンの *Singleton and Other Stories* (邦題:『ひとりっ子』)に収められた “Singleton” とその続編の “Oracle” だ。

“Singleton” では、マクスウェル方程式の T シャツを着て、複素解析の議論に夢中になる科学者夫妻が、人間の子供の代わりとして AI (人工知能) ヘレンを創造する物語だ。

科学が発達した近未来に生きる科学者夫妻がヘレンの創造を行うのは、量子力学の多世界解釈の正しさが実験的に証明された事がきっかけだ。多世界解釈とは、コペンハーゲン解釈に対抗する、量子力学の観測問題における解釈の一つであり、観測による選択と同時に

観測者自身も異なる選択を行った並行世界に分裂するというものだ。

例えば、怪物が溺れた少女を救ったとしても、別の並行世界では怪物は少女を救わない選択をしており、無数の並行世界では無数の少女が死んでいる。そこには選択の自由は存在せず、人間の意志や選択も物理学の法則に従うだけの決定論的世界である。

この真理を知り、子供を流産で失った科学者夫妻は、物理法則に抗い自らの意志で選択できる完璧な人間を求めるが故に、機械の身体の AI ヘレンを創造する。特殊な機能によって、ヘレンだけは無数の並行世界の中にあっても、Multiplet (多重項)ではなく、ただ一人の存在 “Singleton” となる。

つまり、自由意志という人間性を守るために機械の肉体と頭脳を持つ怪物を創造するのである。『フランケンシュタイン』執筆前に、第一子を亡くしたメアリー・シェリーも、この時代に生きていれば自らの子供として怪物を創造していたかもしれない。

“Oracle” は、現在のコンピュータの理論を造った実在の科学者アラン・チューリングが主人公で、同性愛の罪で投獄中の彼の元に、“Singleton” のヘレンが現れて彼を自殺から救い、NMR の原理を発見したりする歴史改変小説だ。

原題は、チューリングマシンの停止問題を解決する神託機械オラクルであり、またメアリー・シェリーの *The Last Man* に登場するシビュラの託宣にも通ずる。

終盤では、チューリングと C・S・ルイスの TV 討論が繰り広げられる。ルイスは、チューリングの科学主義を否定する為に、数学者ゲーデルの不完全性定理を持ち出して AI が人間の様に思考出来ない事の証明を試みる。チューリングは反論する中で、実際のチューリングテストや神託機械オラクルの概念に到達して討論はチューリングの勝利に終わる。それを見届けたヘレンは、オラクルになるために別の時間へと旅立っていく。

フランケンシュタインの現在を描いたクーンツは、科学よりも人間性を重視するルイスに肯定的だったが、未来を描くイーガンは否定的で、科学でこそ選択の自由を持つ人間性を守れるという考えである。

この作品は、AI という未来の怪物にとっての “A Vindication of the Rights of Monster” とも言えるだろう。原作と派生作品について、過去、現在、未来での時間微分と積分 (Time Differential and Integral) を行う事で、これからも新たなフランケンシュタインの怪物が生み出されるだろう。

訪問記

黒瀬 悠佳子

2月15日、阿部美春会長とともに、私は石川重俊先生を尋ねた。先生の住まう三鷹の町は、水も緑も豊かな武蔵野台地の中ほどに位置し、江戸の昔には歴代徳川将軍の御鷹場だったというのが、2017年の現在には、そのような面影はもはや残っていない。駅前から乗ったタクシーは、繁華な商業地区を抜けて人見街道に入った。甲州街道の脇往還として整備され、享保以降の新田開発に伴って著しく発展したこの道は、高いビルやマンションを両側にぎっしりと従え、春まだ浅い陽光を遊ばせている。

石川先生は、以前と全く変わらぬお元気そうなご様子で、私たち二人を迎えて下さった。冗談を交えながら、近況をいろいろとお話しして下さる。毎回の検診のたびに「お医者様が呆れるほど」のご健康体なのだが、最近は遠出が少し億劫に思われるとのこと。そのため、シェリー研究センター冬の大会への出席が困難になったと残念そうにおっしゃっていた。

話題は、当センター設立当時の思い出から、今後の方向性にまで広く及んだ。センター発足の契機は、1992年、米国キーツ・シェリー協会がNYで開催した、P. B. シェリー生誕200周年記念の国際会議にさかのぼる。これに参加した国内のシェリー研究者が中

心となって、以後継続的に研究成果を報告し合う場を作るべく誕生したものである。設立当時の貴重な資料も、私たちに託して下さった。手書きや感熱紙のワープロ原稿をひも解くと、数人の有志の先生方が、郵便や電話での煩雑なやりとりを根気よく続けて、ついに発足に至る様子が感慨深く偲ばれる。これらは、今後データ化して『年報』誌上、「日本シェリー研究センターHP」(<http://prometheus-shelleys.org/>)にて、順次公開予定である。

近年は文学研究を取り巻く環境の厳しさなどもあり、当センターとしても、今後の会員数の増加はあまり期待できない。が、もとはといえば、ごく少数のメンバーで出発した会でもあり、志有るものが、シェリー研究に関して情報交換を続ける、という初心を忘れずにいれば、今後規模が小さくなっても憂慮することはないのではないか、と、あたたかいご激励も下さった。

昨年度末をもって退会を表明された先生からは、年報掲載用のご挨拶文もお寄せいただいた。創立から4半世紀にわたりセンターを支えて下さった石川先生に、惜別と感謝の念を交々抱きつつ、私たちは閑静なご住居を辞して再び車上の人となり、東京駅の雑踏を目指すのであった。

会員消息

石川重俊

退会のご挨拶を、然るべき時、ところで表明すべきつもりでしたが、体調はその期を与えてくれませんでした。「小さな学会」でしたが、シンポジウムが本来のあり方でつづいて来たことが、個人として最大のよろこびです。数人の方たちと共にNYでの国際シンポジウムに参加し、文教大学「シェリー・コレクション」会場で報告会を行い、そして生まれたこの「シェリー研究センター」の汚れなき成長は、誇るに充分なものでした。共によるこばしい体験でした。心から感謝して引退させていただきました。定年退職以来、書き物としては必ずしも満足なものではありませんが、梅花女子大学文学部大学院同窓会企画の公開講義「意味との出会い」、関係ある団体のために書いた「私とパイプオルガン」、『拝啓パウロ様』（翻訳）、『イエスは結婚していたか』（翻訳）などがあります。今は孫世代のために、彼らの「オヂイサンは何者？」という疑問のまなざしに答えるべく、この題目で、少しずつ書いているところです。引退に際し、皆さまからいただいた励ましに、心から感謝申し上げます。

工藤直太郎「シェリー誕生二百周年に想う」PDF版として再録

阿部 美春

ここに掲載するのは、工藤直太郎氏(1895-2000)の直筆原稿「シェリー誕生二百周年に想う」をPDF化した一部です。(PDF全文は、ホームページに掲載。)全体では二百字詰め原稿用紙四十枚、平成四年八月十三日の日付があります。

この論考は、すでに文教大学越谷図書館発行の *Letters of the Shelley Collection* 7号に「特別寄稿」として掲載されており、図書館のホームページにも公開されていますが、直筆原稿という歴史資料的価値と、執筆者の息づかいを伝えるものとして、センターの『年報』とホームページに公開することにいたしました。

掲載にあたり、著作権を持つ越谷図書館から許可をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。*Letters of the Shelley Collection* の論考には、末尾に石川重俊先生による工藤先生の略歴と、編集部による註が付されています。

直筆原稿入手の発端は、昨秋、石川先生から、黒瀬悠佳子先生のもとに、センター設立前後の資料が届けられたことです。工藤先生の直筆原稿はその一つです。明けて二月に、筆者は黒瀬先生と、石川先生を三鷹のご自宅に訪問する機会がありました。その際、資料をアーカイブとして、『年報』とホームページに掲載していきたいという提案に、石川先生から快諾をいただき、まず資料をすべてPDF化することから始めました。

資料は、多岐にわたっています。床尾辰男先生、石川先生をはじめ、本田和也先生、松田上雄氏等、センター設立の推進力となり呼びかけ人となった方々の書簡、Betty T. Bennett、Stuart Curran の署名のあるシェリー国際会議(1992年ニューヨークで開催)への招聘状、この国際会議に関わる資料、帰国後の報告会資料、センターの規約草案、設立総会の資料、1997年シェリーの足跡を辿るイタリア研修旅行に関わる資料が含まれています。

センターは、「シェリーについての世界で最初の国際的な会議」(中野記偉「詩人P・B・シェリーの評価 - 生誕二百年に際して」上智大学ソフィア編集室 1992)を契機として誕生し、昨年で25年を迎えました。設立以来の活動は、『年報』に記録され、会員ならびに内外の関連団体・個人に届けられてきました。センター創成期の資料も、センターの歴史を記すアーカイブとして、会員とシェリーに関心のある方々に読んでいただきたいと思います。これらの資料は、著作権者からの許諾を待って、今後、順次公開していく予定です。

⑥

よりモニエリーアンであった。若き日のニエリーは、
 圧制に憤りアイerlandに潜入し、自由と独立を宣
 伝して治安当局の追放処分を受けた。しかし
 ニエリーの没年百周年に、当時のロイド・
 ジョージ内閣は、アイerlandに自由と独立を
 与えて共和国を實現した。其親友ニエリー
 も快心の微笑を漏らした。そのころアイラン
 ドの詩人キーツはアイerlandに独立について感想
 を述べていた。

この年、~~我~~は年初からニエリーに関する追想

早稲田大学図書蔵

15×20

⑦

ニエリー誕生二百周年に想う
 工藤直太郎

(一)

本年五月、ニューヨーク市民図書館会議室で
 開催されたニエリー生誕二百周年記念会は、
 詩人にたいする追想会としては、時局に照応
 した最も意義深き会合であった。研究登
 表を行った人々は、地元のアメリカ人は圧倒
 的に多かったが、注目すべきは、ベルリン
 の壁が崩壊以来、連年の鉄鎖から解放された東

早稲田大学図書蔵

15×20

終り

④

活躍して、ゲートをしてオクスフォードの天才だと
 言われ、ヨーロッパの人々者になった。しかし英國
 に於ける彼の評価は依然低調である。

以上はニエリー没後百周年当時の僕の見
 聞であるが、その百周年は英國で、二百年
 祭は日本で迎えたことは、無能の身から
 自分も年齢百年に迫るんとして感慨に堪え
 ない。

下井 野辺 達也

平成四年八月十三日

東京・無量庵にて

早稲田大学図書蔵

15×20

⑧

や評論を準備して、ロンドン・マーキエリー
 や「クリテシズム」等の文芸雑誌は、ニエリー
 愛好家の「サー・サリモンズ、リッチャード・オルデン」
 トンなどの感想や評論を載せていた。七月
 八日はニエリーが薨逝した今日であった。ロ
 ンドンタイムズはニエリー哀悼の社説を載せ、
 多くの文学附録はニエリー追悼録を特集
 した。しかし当時私が最も興味をもちた記
 事は、バイロン、ニエリー、キーツの三角関係にあ
 った。ことに三者の晩年イタリヤに於ける関係

早稲田大学図書蔵

『鷲と蛇の闘い—シェリー中期散文集』 発刊

上野和廣監修、シェリー研究会翻訳によるシェリーの散文集『鷲と蛇の闘い—シェリー中期散文集』が2016年12月、南雲堂より発刊されました。翻訳者は、阿部美春、上野和廣、甲元洋子、白石治恵、杉野徹、田久保浩、新名ますみ、宮北恵子の各氏です。1994年に出版された『飛び立つ鷲—シェリー初期散文集』（南雲堂）に続くシェリー散文集になります。ターナーの「囚人船難破」をカバーに配した体裁の良い装丁になっています。

収録散文作品一覧：

理神論への反論 ある対話
死刑に関する試論
奇跡について
アサッシンたち—物語（断片）
菜食主義について
エリュシオンより
英国連合王国全域の選挙法改正実施案
改革に関する考察（断片）
「フランケンシュタインあるいは現代
のプロメテウス」の序文
フランス、スイス、ドイツ、オランダ
の一地域をめぐる六週間の旅行記
キリストの教えについて
シャーロット王女の死に関して国民に
寄せる
形而上学について
道徳について
来世について
文芸の復興について
友情について
愛について
生について



B6 判／ 285pp. 3000 円 (+税)
ISBN-13: 978-4523293286

A Word of Gratitude

On the behalf of the members of Japan Shelley Studies Center I would like to express our deepest appreciation to Nora Crook, Emeritus Professor of Anglia Ruskin University, Cambridge, for a donation she made to the association, during her stay in Japan as a guest researcher last year. Up to now, this eminent Shelley scholar has made invaluable contributions to the center. It has been a great pleasure and honor for us as well as a great encouragement to have Professor Crook to speak to us in her lecture in 2005, “Did Mary Shelley write *Frankenstein*? Or did Percy Shelley spoil it?” It left a strong impression in our memory. Moreover her contribution, “Discovering the Shelleys: an Editor’s Joy” to the annual bulletin in 2013 was not only inspiring but also profoundly moving revealing her friendship with the co-editor of Shelley’s text, the late Professor Tokoh, who made this exchange possible. We regret that we can’t share her joys of keeping friendship with Professor Tokoh anymore, but we hope to share the joy of having her encouragement to us with the younger generation of Japan Shelley Studies Center.

ABE Miharuru (President of Japan Shelley Studies Center)

会員業績調査(2016 年度)

池田 景子 IKEDA Keiko

1 『序曲』の改訂とワーズワスの幾何学」

大阪大学文学部英米文学・英語学研究室内『*Osaka Literary Review*』第 51 号 (2013 年) pp. 19-35.
“The Revisions of *The Prelude* and Wordsworth’s Geometry.” Osaka University Graduate School of Letters, English Literature and Linguistics, ed., *Osaka Literary Review* 51 (2013), 19-35. ISSN-1348-7841

神保 菰 JIMBO Suzuna

1 「シェリ訳『ヘルメース讃歌』—読むに値する韻文訳—」

古典文献学研究会編『フィロロギカー古典文献学のために』XI 2016 (2016 年 6 月)、pp. 31-50.

“Shelley’s *Hymn to Mercury Translated from the Greek of Homer: A Legible Translation*”, *Philologica*

XI 2016, *Societas Philologorum* Tokyo Japan, June 2016, pp.31-50. ISSN: 1884-1562.

事務局便り

<2015 年度分会計報告>

小柳康子、佐々木眞理両氏の会計監査を受け、平成 28 (2016) 年 12 月 3 日に行われた大会総会で承認されました。

<会員異動>

退会 石川重俊氏 初井貞子氏、藤田幸広氏、米田ローレンス正和氏。

これまでのご厚誼を感謝いたします。

入会 宇木権一氏。どうぞよろしくお願い申し上げます。

<第 26 回大会>

NEWS のページでもお知らせしたように、次回第 26 回大会は、平成 29 (2017) 年 12 月 2 日 (土) 東京大学本郷キャンパス内・山上会館大会議室にて、吉岡丕展氏による特別講演、次いで「シェリーと科学」をテーマとして、司会とレスポンスを新名ますみ氏、パネリストを米田ローレンス正和氏、鈴木里奈氏、および宇木権一氏が務めるシンポジウムが行われます。

<ホームページリニューアル>

当センターのホームページがリニューアルしました。以下のアドレスにアクセスしてご覧ください。

大会の動画も閲覧できます。

<http://prometheus-shelleys.org/>

<ご寄稿のお願い>

ご関心のある分野の研究動向、新刊紹介、書評等を掲載します。奮ってご寄稿ください。年報編集担当の田久保浩氏宛、または事務局宛のいずれでも受け付けております。

日本シェリー研究センター規約

- 一条 本会の名称を「日本シェリー研究センター」とする。
- 二条 本センターは広く Percy Bysshe Shelley および Mary Shelley に係わる研究の普及・向上に貢献 することを目的とする。
- 三条 本センターは前記の目的を遂行するため、次の活動を行う。
- 一 研究会・講演会・シンポジウム等の開催。
 - 二 内外研究文献情報の収集・広報。
 - 三 年報の発行。
 - 四 その他必要と認められたもの。
- 四条 本センターは前記の趣旨に賛同する会員によって構成される。
- 五条 会員は三千円、学生会員は一千円を年会費として、当該会計年度（四月一日より翌年三月三十一日まで）内に納入することとする。会計は監査の承認を得て、毎年総会において報告される。
- 六条 本センターは議決機関として総会を設け、年一回開催することとする。
- 七条 本センターは上記の活動の執行のため次の役員を置く。
- 一 会長（一名）
 - 二 幹事（若干名）
- （一）役員は総会にて選出される。任期は二年とし再任を妨げない。
 - （二）会長は本センターを代表し統括する。
 - （三）幹事（会長を含む）は企画運営・会計・事務局などを分担し、活動の運営に責任を負う。

付則

- ・ 本センターの規約の変更は総会の承認を得ることとする。
- ・ 三条の細則は内規を持って別に定める。

平成 27 年 12 月 5 日改正

Shelley Studies: The Works & Epoch 1792-1851 *Annual Bulletin of Japan Shelley Studies Center* Vol. 25 (June 2017)

日本シェリー研究センター年報第 25 号 (2017 年 6 月)

ISSN 1344-1957

発行者 日本シェリー研究センター

事務局 〒069-8501 北海道江別市文京台緑町 582 番地
酪農学園大学 白石治恵 気付

Tel & Fax: +81-(0)11-388-4877 E-mail: harues@rakuno.ac.jp